

中国長白山麓の錦江村における井幹式民家の
平面および断面構成の変容THE TRANSFORMATION OF PLAN AND SECTION FORM OF LOG CABIN HOUSES
AROUND CHANGBAI MOUNTAIN, CHINA

高松花*, 濱定史**, 小林久高***, 藤川昌樹****, 安藤邦廣*****

*Songhua GAO, Sadashi HAMA, Hisataka KOBAYASHI,
Masaki FUJIKAWA and Kunihiro ANDO*

This study examines the transformation of Log Cabin house's plan and section form in Jinjiang village since Han Chinese moved in 1930. The research purpose is clarifying the reasons of transformation based on the analysis of relationship between life style and space using. As the result, several changes were found that a narrow kitchen; kang moved from south to north in Dongwu and Xiwu; a living room emerged connecting Ting and Dongwu(or Xiwu) etc. Moreover, according to forest law, resource shortage was expressed by roof change.

Keywords : Jilin, Han chinese, Floor plan, Kang

吉林省, 漢族, 間取り, カン

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

中国の吉林省長白山麓では、地域の自然環境および厳しい気候条件から防寒、保温に適応した特徴的な民家が見受けられる。これらの民家は井幹式^{注1)}と呼ばれる構法で建てられており、多くの人々が生活している。中国は1970年代末の改革開放以後、高度経済成長によって道路や通信などの整備が進み、都市への人口流入が加速した。さらに、新農村建設^{注2)}による生活の変化は、吉林省長白山麓の集落にもその影響を与えている。

本研究では、全ての住宅が井幹式民家で建てられた長白山麓に位置する錦江村を対象地(図1)とする。さらに、漢族が移住した1930年代から現在までに建てられた井幹式民家を対象として、平面および断面構成の変容過程を明らかにするとともに、生活と内部空間利用の関係に着目し、変容の要因を考察することを目的とする。

1-2 既往研究と本研究の位置づけ

吉林省の民家に関する先行研究としては、張馭寰(1985)¹⁾が吉林省長白山麓の井幹式民家を報告したものが最も古い。

次は孫大章(2004)²⁾による中国民居研究の中で井幹式民家の分布が報告されている。陸元鼎(2003)³⁾は長白山地区の井幹式民家の建築様式の特徴およびロシア民族の井幹式や雲南の井幹式民家との相異点を述べている。

2005年には、王記他⁴⁾による錦江村の生活を美術の視点から捉え

た著述が発表された。王記他は、主に満族の生活に着目して報告しているが、何らかの記録が残っているのは朝鮮族・漢族に付いてのみであるので、不可解な点が残る。周立軍他(2009)⁵⁾は主に東北方の漢族、満族、朝鮮族の民家を平面構成と構造の視点から報告し、井幹式民家を森林資源が豊富な地域の建築様式の一例として位置づけている。

さらに、肖冰(2010)⁶⁾と劉思鐸他(2011)⁷⁾は錦江村の井幹式民家の建築構造とその発達に関して研究している。高松花他(2012)⁸⁾による井幹式民家の建築構法と生産技術の特性とその成立要因に関する研究もある。

これらは、建築様式の特徴を説明した著作、民族学における地域の特徴を持つ民家の分類学的研究、さらに、建築構造及び構法の特徴と生産技術に着目した研究である。しかし、井幹式民家の変容過程を論じた研究はない。本研究は、既往研究を踏まえて現存する井



図1 調査対象地

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士後期課程・修士(デザイン学)

** 東京理科大学工学部建築学科 助教・博士(デザイン学)

*** 島根大学大学院総合理工学研究科
講師・博士(デザイン学)

**** 筑波大学大学院システム情報系 教授・博士(工学)

***** 筑波大学 名誉教授・工博

Graduate Student, Grad. Sch. of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, M. Des.

Assistant Prof., Faculty of Engineering, Tokyo Univ. of Science, Dr. Des.

Lecturer, Interdisciplinary Graduate School of Science and Engineering, Shimane University,
Dr. Des.

Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

Prof. Emeritus, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

幹式民家の平面および断面構成の変容を明らかにし、生業・生活・木材資源の変化からその要因を考察する点に意義がある。

1-3 研究方法

2011年8月31日～9月3日、2012年4月10日～18日にかけて錦江村における聞き取り調査と平面採集の調査を行なった。

まず、2010年に作成した^{注3)}錦江村の集落配置図(図2)に新築と建設中の民家を追加して記入した。その結果、2012年段階の52棟の民家の中で、8棟が建設中で、8棟が空家であり、36棟で生活が使用されていることがわかった。36棟の民家のうち28棟が生活用、8棟が観光のための宿泊用に建てられたものであることも判明した。空家を含む40棟の民家の間取りの詳細な実測調査を行ない(表1)、20名へのヒアリング調査を行なった^{注4)}。

2. 錦江村における井幹式民家の概要

2-1 錦江村の概要

錦江村は中国東北部の北朝鮮国境付近の最高峰である長白山の西側、標高約900mの山麓に位置している。年平均気温は-0.3～3.7℃と冷涼で、最も暑い7月の平均気温は19.4℃、最高気温は34.8℃であり、最も寒い1月の平均気温は-19.7℃、最低気温は-44.1℃である。

この地域には1860年代頃には、満族が居住していた。1910年頃に、朝鮮半島から朝鮮民族が移住し、狩猟や薬草採集による生活をはじめた。当時は錦江村に26戸、96人が住んでいた^{注5)}。1933年頃に山東省から漢族が移住し、この地域は漢族、朝鮮族、満族の3民族が混在することとなった。1945年春に疫病が流行し、多くの人々が亡くなったため、朝鮮族と満族は漫江鎮など近隣の集落に移住した。2012年4月現在の住民はすべて漢族で、34戸68人が居住している。錦江村では2008年に電気が敷設されたが、水道はまだないため、井戸水が利用されている。

錦江村は大きく2つの地域(山上と山下)に分けられる。いずれも森林に囲まれた山の傾斜地に位置し、山下の集落では東西方向の道の両側に民家が配置されている。

2-2 基本構成と住まい方

中国の多くの農村では都市化の影響を受け、開発が進み、様々な形態の民家が建てられているが、錦江村では伝統的な暖房施設カ

表1 調査一覧

時代別	主屋NO	建築年代	屋根型	外形寸法(m)	各室の開口幅(m)			部屋数	カン位置	竈の位置	家族数(人)	備
					西屋	台所	東屋					
I期 (1930-1960)	1	1930年頃	1重式	4.6×9.9	2.7	4.7	2.5	3	南	南	4	
	2	1950年頃	1重式	5.1×11.0	—	—	—	3	北	北	—	診療所
	3	1950年頃	1重式	5.0×9.3	2.9	3.3	3.1	3	南→北	南→北	3	1978年に改築され、カンの位置変
	4	1960年頃	1重式	4.5×9.6	2.6	4.4	2.6	3	南	南	0	
	5	1960年頃	1重式	4.8×5.6	2.6	3.0	×	2	南	南	0	
	6	1960年頃	1重式	4.9×9.3	3.0	3.2	3.1	3	南→北	南→北	3	1977年にカンの位置変化
	7	1960年頃	1重式	4.8×9.6	2.8	4.1	2.7	3	南	南	0	
	8	1960年頃	1重式	4.9×9.5	2.7	4.1	2.7	3	南	南	0	
	9	1963年	1重式	5.1×9.9	2.8	4.2	2.9	3	南	南	2	
	10	1964年	1重式	4.8×9.9	3.2	3.6	3.1	3	南	南	3	
	11	1966年	1重式	4.4×9.8	3.1	3.7	3.0	3	南→北	南→北	2	1980年頃にカンの位置変化
II期 (1970-1990)	12	1966年	1重式	4.6×5.9	2.9	3.0	×	2	南	南	2	
	13	1970年頃	1重式	4.5×6.8	×	3.5	3.3	2	北	北	1	
	14	1970年頃	1重式	5.3×9.3	—	—	—	3	北	北	3	
	15	1970年頃	1重式	5.3×9.6	2.6	4.2	2.8	3	南	南	0	
	16	1970年頃	1重式	4.9×10.4	3.5	3.6	3.3	3	北	北	2	
	17	1970年頃	1重式	4.8×5.6	×	3.0	2.6	2	南	南	1	
	18	1978年	1重式	4.8×8.9	2.5	3.7	2.7	3	南	南	3	
	19	1978年	1重式	5.3×9.7	3.2	3.5	3.0	3'	北	北	2	1990年頃、台所を2つの空間で分けられた。
	20	1980年頃	1重式	5.1×9.4	3.1	3.2	3.1	3	北	北	3	
	21	1980年頃	1重式	4.7×9.7	3.1	3.4	3.2	3	北	北	1	
	III期 (1990-現在)	22	1990年	1重式	4.3×8.9	3.0	2.9	3.0	3	北	北	3
23		1990年	1重式	5.8×6.8	×	3.6	3.2	2	北	北	1	
24		1990年頃	1重式	4.7×6.8	3.5	3.3	×	2	北	北	1	
25		1995年	1重式	4.6×9.2	2.8	3.2	3.2	3	北	北	3	
26		2002年	2重式	4.8×6.7	3.2	3.5	×	2	南+北	南+北	2	
27		2002年	2重式	4.7×9.5	3.0	3.5	3.0	3	北	北	4	新築する時カンの位置変化
28		2005年	2重式	4.8×9.6	3.2	3.1	3.3	3'	北	北	3	
29		2005年	2重式	4.8×9.5	3.1	3.3	3.1	3	北	北	4	
30		2008年	2重式	4.3×6.0	×	3.2	2.8	2	北	北	0	
31		2009年	2重式	5.3×6.2	3.6	2.6	×	2'	北	北	3	
32		2009年	2重式	4.8×6.8	×	3.0	3.8	2	北	北	0	
33	2010年	2重式	4.8×9.7	3.2	3.3	3.2	3	北	北	3		
34	2010年	2重式	4.7×10.8	3.8	3.5	3.5	3	北	北	0		
35	2011年	2重式	4.8×9.1	3.1	3.0	3.0	3	北	北	3		
36	2011年	2重式	5.3×10.9	3.8	3.3	3.8	3	北	北	3		
37	2011年	2重式	6.4×10	3.2	3.6	3.2	3'	北	北	0		
38	—	1重式	4.6×9.6	—	—	—	3	北	北	—		
39	—	2重式	4.4×9.7	3.2	3.4	3.1	3	—	—	—		
40	—	1重式	4.6×6.1	3.2	2.9	×	2	北	北	—		

- ・一は不明。
- ・×はなし。
- ・主屋N026の南+北は1室の両側にカンを持つ。
- ・'は台所の中央柱間で前後に分かれているため、2つの部屋である。
- ・■の部分は庁と寝室が1室になっている。

を持つ民家がまだ存在し、現在でもカンを中心とした生活をしている。錦江村では主屋を敷地の北側に配置し、入口を南向きに建てるのが特徴である(図2)。敷地の周囲は木障子と呼ばれる木柵で囲ま

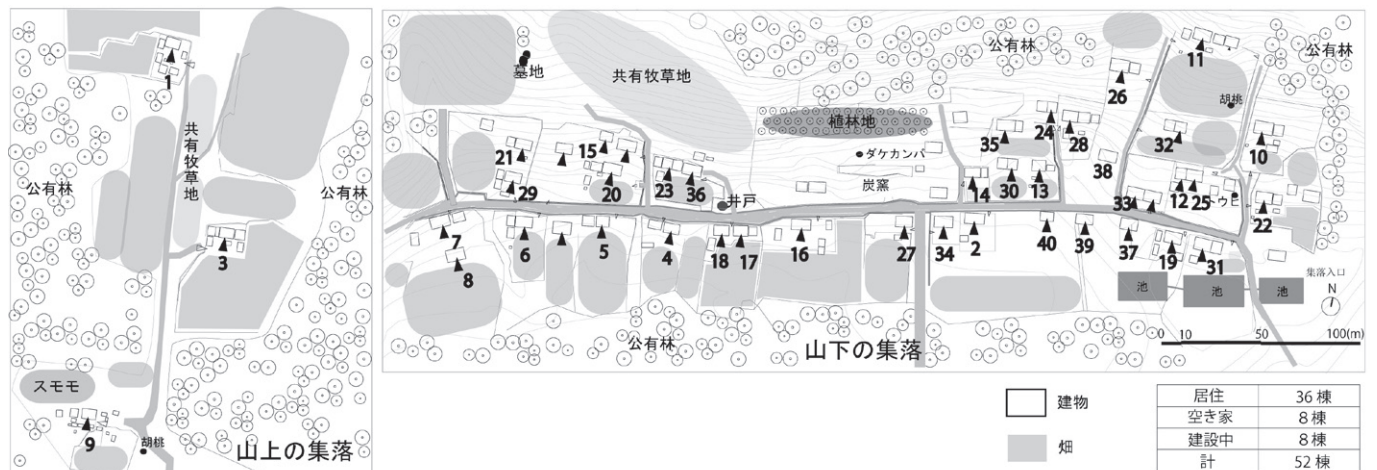


図2 集落の配置図(2012年)

れていて、敷地の周りに果樹やカシワなどが植えられている。

錦江村では、主屋が一棟と様々な機能を持つ付属小屋から敷地が構成されているのが一般的である(図3)。また、山下の集落では、子供が独立したため、敷地内に2棟や3棟の主屋が建てられていることもある。NO 4～NO40までの敷地内の畑では、主に野菜を栽培している。しかし、NO 1～NO 3までの民家では、生活が昔ながらの自給自足であり、敷地内には生活に必要な建造物が山下の集落より完備されている。また、敷地内には、野菜以外にも食料を作るための広い畑が配置している。

すべての民家の外壁は丸太を使用する井幹式構法で建てられ、そのうえに、梁、桁、野地丸太が架けられ、草、土、最後に樽板の順番で葺かれている。

NO 3 (図3) は古く伝統的な様式が残っている民家であり、両親と娘の3名が住んでいる。先代が1940年代に山東省から移住し、1950年代に主屋を建て、1976年に改築した。現在、敷地内には主屋、2棟の倉庫と1棟の作業小屋、トウモロコシ専用の貯蔵小屋、牛小屋、豚小屋、鶏・アヒル小屋がある。自家用のトウモロコシや大豆などの農作物、白菜やニンニクなどの野菜、油類のヒマワリ、薬草の人参(朝鮮人参)を作っている。野菜は夏用野菜(大角豆、茄子、ピーマン、葱、キャベツなど)と冬の漬物用の野菜(大根、茄子、キュウリなど)を栽培している。牛は食用と耕作用であり、豚は食用、鶏とアヒルは卵と肉の食用に飼っている。春と夏は周辺の山で山菜の採集もする。

錦江村の間取りは台所、東屋と西屋からなる3室の構成のもの

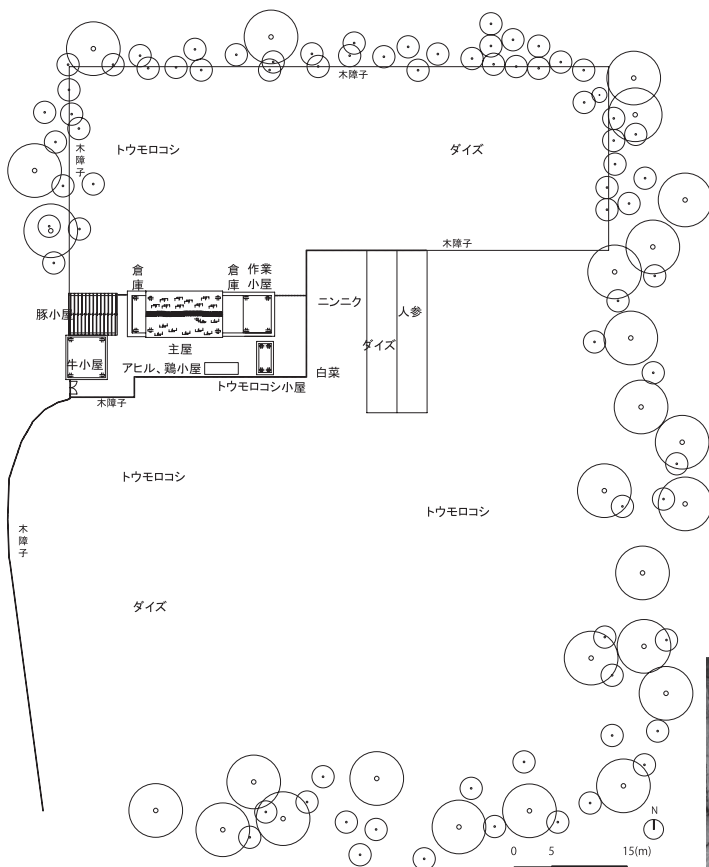


図3 NO 3 民家の敷地配置図

台所と、東屋(または西屋)の2室構成のもの何れかである(図4)。正規の家族用には3室構成のものが建設され、新規の来村者(NO 5、NO12、NO13)や独身の人(NO23、NO24)や観光のための宿泊用(NO30、NO32)など、正規とは認められない場合に2室構成のものが建設されたとみられる。図4左のNO13には老人の夫婦と二人の息子が住んでいたが、1990年代に長男が、2011年には次男が独立し、別棟を新築した。同右のNO22は3室の典型的な平面構成であり、夫婦と一人の子供が住んでいる。台所、東屋と西屋の3室で構成され、台所には大きな水瓶があり、ここで洗面や洗濯を行ない、台所の竈で炊事をすると、東西の部屋のカンが暖くなる。東屋は夫婦の寝室であると同時に、接客、団らん、食事など家族の主要な生活空間となっている。西屋は子供部屋として使用される。

暖房施設のカン^{注6)}の位置は南側と北側の両方がある。カン(図5)は、床の一部であり、焚口に竈を設けることで炊事にも利用する。煙は寝室の床下に設けた煙道と煙突を通して外部に排出され、その排煙を通して暖房する設備である。カンの大きさは3m×2m、高さが約60cmである。東屋のカンは1年間を通して使われ、西屋のカンは主に9月から翌年4月まで用いられるが、夏でもカンの湿気を飛ばすために時々使用される。

また、台所では冬期の採暖装置として火壁が補助的に用いられる(写真1)。火壁の焚口は台所に設けられ、竈はない。最近、新築する時には火壁と替わりにカン炉(写真2)が設置されている。カン炉とは寝室の北側に設置した高さが60cm程度の暖房施設である。カン炉は椅子、物置き場として利用されている。

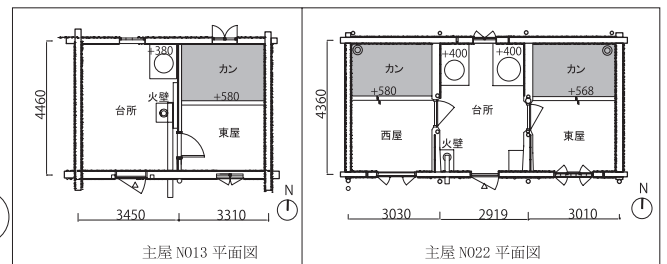


図4 2室と3室の典型的な平面図

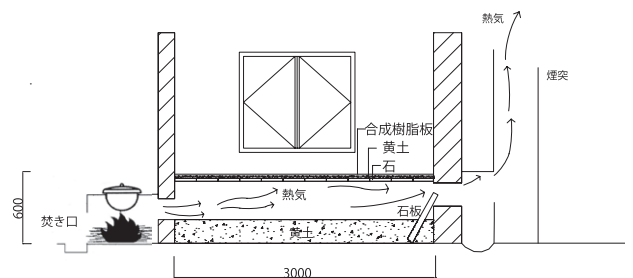


図5 カンの断面図



写真1 火壁 (NO 3)



写真2 カン炉 (NO33)

3. 各年代の平面および断面構成の特徴

3-1 時代の区分 (図6)

調査した民家を建設時期ごとに、1930年代から1960年代をⅠ期、1970年代から1980年代をⅡ期、1990年代から現在はⅢ期に大別し、分析を試みた(表1)。1980年代及び1990年代には民家の建設棟数が5棟と少なかったことが分かる。また、2室もしくは3室の間取りを基本とし、南側にカンを持つ民家が、伝統的な漢族民家^{注7)}であったと考えられる。しかし、錦江村ではカンの位置が年代が下るにしたがって南側から北側に変わっていったことが判明した。また、カンの移動によって台所の利用も変化する一方、屋根の形にも変化が見られた。その平面および断面の変容過程を、実測調査をもとにまとめると図6のようになる。

・ 平面

Ⅰ期からⅡ期への主な変化は、カンが南から北に変わったことにある。北側に開口部を設置していることもカンの移動に伴った変化とみられる。また、3室型では台所の空間が狭くなることもある。

1960年代までの民家12棟のうち9棟が南にカンを持ち、1970年代から新築されたものは北にカンを持つ形式のものが27棟中24棟と多い。さらに、南カンを北カンに改築した例もある。

聞き取り^{注8)}によると、民家は南下りの斜面に建てられるため、南にカンを設置すると家屋の重心が南側に集中し、南側に倒れる可能性が高いという。また、北にカンがあれば北壁の木材が乾燥し腐るのを防止することもできるという。さらに、ミシンでの作業に南側の光が必要なため北側にカンを移し、南窓にミシンを置くほうが都合が良いという見解もあった。

このカンの北側への移動に伴い、竈の位置もそれまでの入口脇から台所の奥に移動した。台所では手前の南側に竈を置き、奥の北側を食料の保存場所として使用していたが、移動後は北側に竈が置かれ隣室のカンを暖めるようになった。

NO3の主人からの聞き取りでは、竈を含む台所が入口付近にあると見栄えや衛生上よくないということも、移動の理由として挙げられた。錦江村では、このように南側から北側にカンを移動した民家を3棟確認できた。また、NO22とNO27のような元の家は南カンであったが、新築する時にカンの位置を北側に設置した場合もあった。

1960年代までの12棟のうち5棟の台所の幅は4m以上、東屋と西屋の幅は3m以下であった。このような民家ではまだ昔の生活が維持されており、南側にカンがあり、北側はタンスなどもの置き場として使用されている。食事、団らんなどの主な生活は東屋のカンの上で行なわれている。台所が一番広い部屋で、炊事や食料の保存の利用だけではなく、トウモロコシをひき臼(写真3)で挽く作業も行なわれる。

1960年代以後の民家を見ると、台所が狭くなって、台所で行なわれていた炊事以外の作業はほぼ作業用の倉庫で行なわれている^{注9)}。また、食事は東屋の土間に設置されたテーブルの上で行なわれている(写真4)。カンの上端部を椅子として利用することもできる。接客、団らんなどの行為もカンと椅子を使って行なわれている。

Ⅱ期からⅢ期までの変化をみると、1990年代に入ってから台所が2つの空間に分けられている例が見られる。台所に間仕切りを設け、入口に^{注10)}と呼ばれる室をしつらえている。これは通路として使用されていることが多いがNO28の主屋では農業用の道具置き場とし

ても利用されている。

NO33とNO35のような主屋は、近年見られる間取りである(図5Ⅲ期後者図参照)。カンがある部分だけ内壁を設け、^{注11)} 庁と東屋か西屋の寝室を統合し、部屋の空間を広げていた。台所は中央北側に縮小され、3室型の台所の空間はより狭くなった。

・ 断面

集落の主屋の屋根の形は2種類である。Ⅰ期とⅡ期までの屋根は1重式であった。しかし、Ⅲ期には2000年代から2重式屋根が出現したことがこの時期の断面の大きな変化であると考えられる。

1重式の屋根構法^{注11)}は、直径70mm程度の丸太を棟木から桁にかけて並べ、その上に草を厚く敷き、さらに土を敷き詰め、最後に樽板を葺く構法を基本としている。寝室ではカンによる暖房効率を上げるために紙で目張りした天井を設け、屋根との間に空気層をつくっている。一方、台所では調理で火を使うため排煙の必要があり、野地丸太がそのまま露出している。煙が屋根を通過し、排煙できるようにするためと言われている。

これに対し最近新築された民家の屋根では2重式屋根の構法が見られる。1重式屋根は断熱性と通気性を同時に満たす構法であるが、2重式屋根においては、上の部分は雨仕舞いのためであり、下の天井の部分は断熱性と気密性を確保するためのものである。天井の野地板の上に、草と土を敷く。また、妻面中央の小屋束によって登梁が支持され、その上に棟木が載せられる。登梁の上に母屋を配置し、釘で固定する。最後に母屋の上に石綿瓦を葺く。また、天井上の部分に、断熱材として土の代わりに木屑を使うこともある。木材の不足、特に大径木の不足で木瓦の維持が難しくなったという理由によって、屋根の構法が変化したということが村長からの聞き取りによってわかった。台所においては、竈の焚き口からでる煙の排煙のために通気性が必要となる。天井が張られるようになった新築の台所でも、断熱性と通気性を確保するため、竈からの熱を蓄熱すると同時に煙を外に出すための排煙機(写真5)が使用されるようになった。

3-2 個別事例の説明 (図7)

(1) NO1

NO1は錦江村における一番古い民家で、このⅠ期の典型的な民家

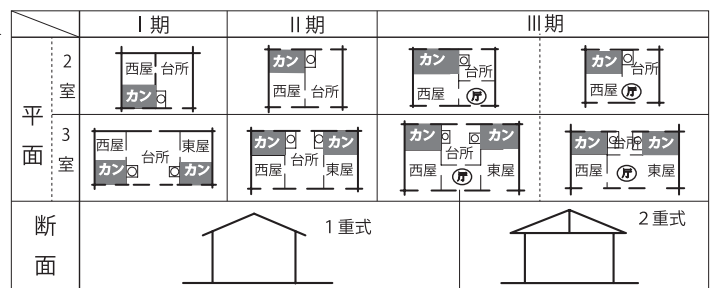


図6 平面及び断面構成の変容過程



写真3 ひき臼 (NO3) 写真4 食事 (NO29) 写真5 排煙機 (NO17)

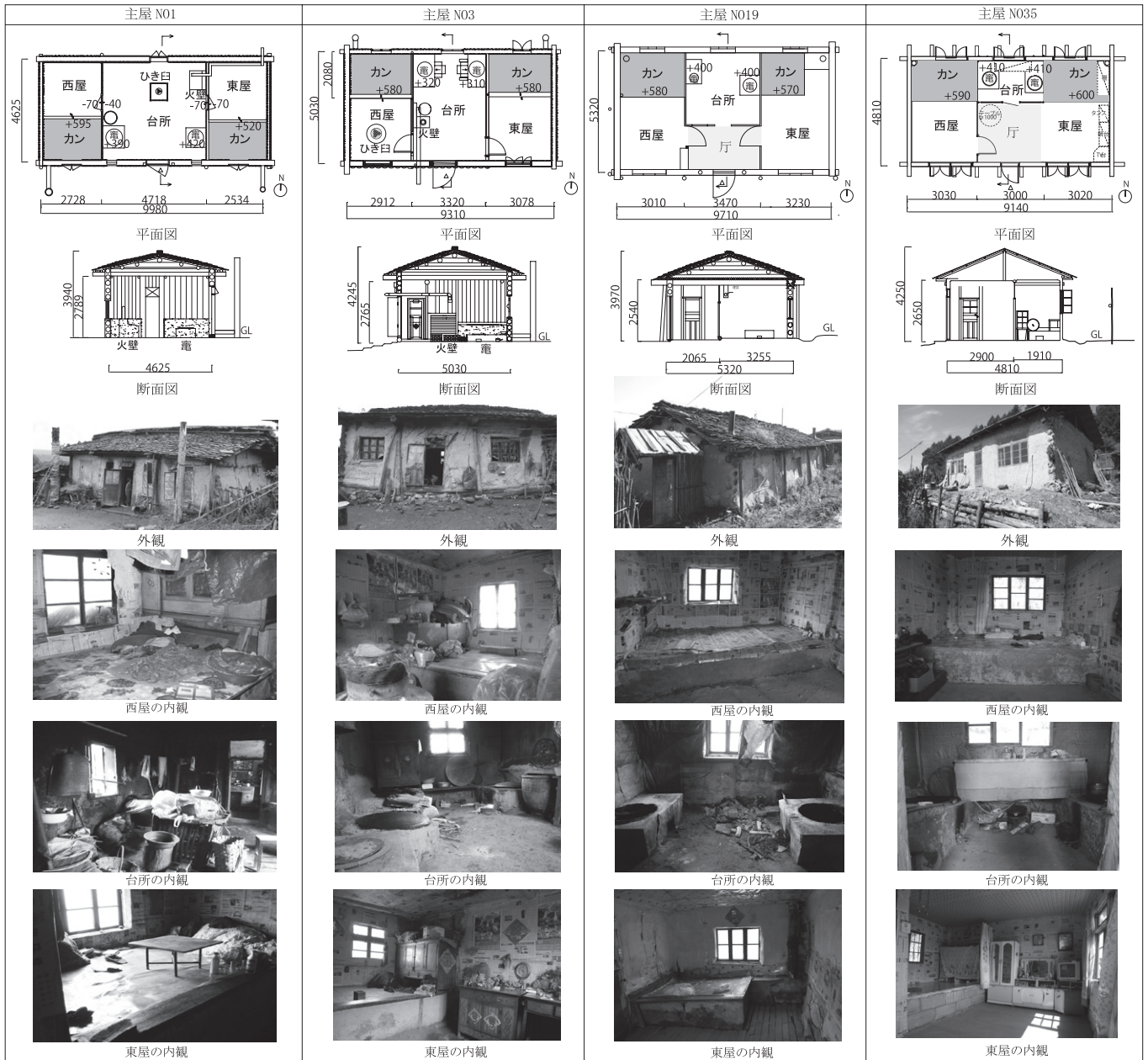


図7 各時代の民家

である。1930年頃に建てられたこの民家は山上の集落に位置し、建設当時のままである。両親と息子一人、娘一人が住んでいる。先代がこの民家を建てたという。農業が主な生業で、トウモロコシ、ジャガイモなどを生産していた。また、タバコの栽培も行っていた。1945年の疫病のため、集落の村民たちが山下の集落に移住したが、この家は生活が厳しく、また新築する労働力がなかったため、移住ができなかった。現在は、トウモロコシ、大豆などの栽培とタバコも続けて生産を行なっている。春と夏は周辺の山で山菜の採集もすることであった。

N01の間取りは、南側にカンがあり、西屋、台所、東屋の3室で構成されている。東屋は、両親の寝室であるが、カンの上で家族の食事、団らん、接客が行なわれている。そして夫人の針仕事が行なわれる部屋でもある。子供用の西屋のカンは現在タバコ、薬草などの乾燥用として利用されている。東屋と西屋のカン以外の床面と台

所の床は土間である。N01の平面図をみると、台所が一番広い部屋であり、真ん中にはひき臼が置かれており、使用もされている。炊事だけではなく、食料を瓶に入れて保存するためのスペースとしても台所は機能している。農業が主な生業であるため、台所で農作業も行なわれている。農業用の道具などは台所から倉庫へ保管場所が変わったという。

(2) N03

N03は建設後に南カンから北カンへ改築された代表的な事例である。この家も伝染病が流行した時に山下の集落に移住しなかった。2-2で述べた通り、現在この集落に残っている民家では、この平面構成が一番多い。東屋には両親が住んでいて、西屋には娘が住んでいる。東屋はN01と同様、日常生活に利用されているが、針仕事はカンの上ではなく南側に置かれたミシンによって行なわれている。また、食事はまだカンの上で行なわれているが、接客には椅子が使

われている。改築以後の台所は、農作業以外N0 1と同じように利用されている。ひき臼は西屋に移動して利用されている。

この民家には作業用の小屋（写真6）がある。この小屋は主に朝鮮人参の乾燥場として利用され、ほかに農作物の脱穀などが行なわれている。農業用の道具は倉庫に保管している。

（3） N019

N019は1978年に建設されたが、台所が2つの空間に分けられている代表的間取りである。この民家では1990年代に台所部分を改造した。東屋と西屋はⅡ期の民家と大差ない。ただし東屋の土間は、後に板床の仕上げとされている。この集落で床仕上げが板材である民家はこの民家しかない。聞き取り調査によると、朝鮮人参の販売のため客数が増えたので、屋内の見栄えを良くするために改造したとのことであった。また、床を張ったのは接客が目的であり、木材が不足していたため東屋のみ板張りにしたという。庁は両寝室に入れる通路として利用している。この家では農作物は自給用に生産し、副業として朝鮮人参の販売も行なっている。1990年代から朝鮮人参は乾燥しているものと乾燥しないものの販売が同時に行なわれるようになった。それで、この民家ではすべての農作業を行なう空間として作業用の小屋の代わりに屋外の作業空間（写真7）が臨時に造られ、機械を利用して使用されている。

（4） N035

N035は2011年に建てられた民家であり、庁と東屋が一つの部屋に統合されているのが特徴である。また、部屋の床はコンクリートで仕上げられている。西屋はこれまでの民家と同様に子供の部屋として利用しており、ミシンの置き場としても使用されている。このため女性の作業は西屋で主に行なわれている。台所はN019よりも狭くなって炊事のみ利用である。洗面や洗濯は東屋で行ない、夏は屋外です。この家も朝鮮人参の栽培が副業であるため、東屋は家族のもっとも主要な生活空間であり、また接客のための重要な部屋である。付属小屋は貯蔵用の倉庫のみであり、農作物には屋外の臨時作業場が利用されている。

4. 錦江村を取巻く社会の変化

長年に渡る植民地支配と戦争のため、中国は1949年の建国以後も長い時間、経済的・社会的に混乱していた。1950年に朝鮮戦争に参戦し、さらに1958年から1960年まで大躍進運動^{注12)}が行なわれ、農民の集団化が進んだ。当時、錦江村は弧頂子生産合作社^{注13)}という機関が集落を管理し、集落の村民たちが一緒に農作業をした。

こういった社会的運動の中で大きな問題になったのは村民たちの経済状況が厳しくなったことである。さらに度重なる自然災害により人々の生活はますます厳しい状況におかれた。この問題を改善するため、錦江村では1972年から朝鮮人参栽培が始まった⁹⁾。朝鮮人参は植えてから4～8年後に収穫するが、より長い時間栽培して収



写真6 作業用倉庫 (N0 3)



写真7 屋外の作業空間 (N019)

穫する場合もある。これは、朝鮮人参は成長期が長ければ長いほど商品の価格が高いためである。

文化大革命の終了から1980年代までは、国の政策の変更に伴い大きな経済的・社会的変化が行なわれた。1978年の改革開放政策により、農業用の様々な機械が導入した。これは、農作地が広がり、食糧の生産量が増加する要因となった。

1990年代には、朝鮮人参の栽培は乾燥してないものと乾燥しているものをすべて商品として販売ができるようになった。しかし、当初は乾燥しているものしか販売ができなかった。そのため、1970年代には、朝鮮人参の乾燥場所として作業用の倉庫が建設されている。1970年代末には朝鮮人参の売り上げが好調で、1980年代には朝鮮人参の栽培が増え、1990年代に朝鮮人参の販売はピークになった。したがって、集落にビジネス目的で訪ねる人々の数も増加した。彼らは、村の各家に入り、商談をするという。

2006年、錦江村は撫松県政府の「県級伝統居民文化遺産保護単位」に指定され、保護の対象となった。このため、集落の周辺の木材の無断伐採と集落内における煉瓦造の民家の建設は禁止されている。しかし、1985年の森林保護法の施行により、無断伐採は禁止されているが、錦江村の村民たちには自給用の伐採が認められている。かつては、木材を自由に利用することができたが、現在では毎年伐採区を決めて伐採を行なうようになっている。これは、集落の燃料である薪を確保するため設置した区である。このため建設木材を準備するのは難しくなった。このような木材不足の問題により井幹式民家を維持管理していくのがますます厳しい状況にある。

5. おわりに

本研究では、錦江村における井幹式民家の平面および断面構成の変容過程を明らかにした。社会の変化からその要因の考察を行なうと以下のようにまとめることができる。

① I期までは厳しい経済状況と、寒冷な気候のため、村民たちのすべての生活は主に主屋で行なわれていたことがわかった。

I期からⅡ期への変容には、台所の縮小とカンの南から北への移動があった。前者は農作物の貯蔵及び加工の作業が台所から付属小屋に移されたことが契機となった引き起こされたと考えられる。また、後者については構造的・生活的・社会的な様々な理由をヒアリングから得ることができた。

Ⅲ期では、朝鮮人参の販売が最盛期をむかえたことにより接客空間が必要となったことを契機として台所が分離され、庁が出現したと考えられる。

② 森林保護法により、無断伐採が禁止されているため、木材の伐採が難しくなった。そのため、1980年代から1990年代に建設された民家の数は少ない。2000年代に入ってから、建設のための木材不足が屋根の変容に表われるようになった。これは、屋根の檼板用の木材に一番太い材が使われていることが原因である。

近年における社会の変化とそれに伴う地域資源の変化に対応して錦江村では民家の平面および断面構成が変容した。今後は、錦江村における井幹式民家構法の変容についてより詳しく研究し、生活と森林資源の変化により井幹式民家がいかに変容したかに関して検討したい。

謝辞

調査にご協力を頂いた民家所有の皆様にあらためて深く感謝いたします。漫江鎮政府の方々には、資料をご提供して頂きました。御礼申し上げます。なお、本研究は文部科学省科学研究費(23246104)による成果の一部である。

参考文献

- 1) 張馭寰：吉林民居，中国建築工業出版社，1985.9
- 2) 孫大章：中国民居研究，中国建築設計研究院建築歴史研究所，中国建築工業出版社，pp.64～180,2004.8
- 3) 陸元鼎：中国民居建築，華南理工大学出版社，pp.240～245,2003.1
- 4) 王記，王純信：最后的木屋村落－長白山滿族非物質文化遺產保護研究，吉林文史出版社，吉林美術出版社，2005.11
- 5) 周立軍他：東北民居，中国建築工業出版社，2009.12
- 6) 肖冰：東北地区井干式傳統民居建構解析，陝西建築，2010,2
- 7) 劉思鐸，于薇：中国東北井干式傳統民居的地域特色研究，蘭州理工大学学报，第37卷，2011.9
- 8) 高松花他：中国吉林省長白山麓錦江村における井幹式民家の構法と生産技術に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.678，pp.1853-1860,2012.8
- 9) 漫江鎮政府：漫江鎮鎮志，1983

注

注1) 井幹式という構法は材を横に積み上げる校倉構法を持つ建築として、中

国では井幹式(チンカンズ)と呼ばれ、日本では井籠式(セイロウシキ)と、朝鮮半島では累木式(グイトルジブ)と呼ばれている。対象地域においては壁に土が塗られているのが一般であり、木刻楞(ムコオロオン)と呼ばれる。

注2) 新農村建設は2005年10月に「十一五計画綱要建義」で決定された。

注3) 参考文献8)，pp.1854

注4) 聞き取り調査は、在職中の村長と前村長(83歳)、政府からは文化部長、錦江村の調査対象家屋からはN01、ほか20名に対して行なった。

注5) 参考文献9)による。

注6) 1960年代までは、カンの材料は土と石だったが、現在は煉瓦も使用する場合もある。

注7) 参考文献5)，pp.56～63

注8) カンを北側に変更した3軒の主人に聞き取り調査を行なった。

注9) N03の主人から聞き取り調査を行なった。

注10) 本研究では庁と書いているが、錦江村では呼び方がない。しかし、聞き取り調査を行なった21名の村民たちはあえて名付けるならば庁(ツイン)であると答えていた。

注11) 参考文献8)，pp.1858

注12) 大躍進運動は1958年～1960年までの運動であり、毛沢東主席が発動した、工業・農業などの飛躍的な発展をめざす社会主義建設総路線の運動と言われる。

注13) 農村村における「集团的經濟組織」である。

(2013年9月9日原稿受理, 2014年1月8日採用決定)